

二〇一三年第十二月三十一日

@kzh r (Twitter 自由言語大學文學部)

一 はじめに

じつさいには こんないひまはしに できはすこと  
はさうあることではないけれど、幕末から明治  
にかけてのある種の文献をながめてみると、題に  
かゝげたやうな表現をみいだすことがある。一讀  
筆者のめざすところの あきらかなむきにはこの  
視野のせまい 小論など ひまつぶしにもなるまい  
が、わたくしにはすこしく 発見をともしなふもので  
もあつたので、いさゝかかみをつひやしてこゝ  
にしるしてみたい。

こゝにあつかふはなんでもない第の字である。  
ただ、めうなところにつく。

(一) 女王の政府は此報告を熟考し下に記したる  
取極を以て千八百五十八年第八月廿六日大  
不列顛と日本と取結たる條約の第三ヶ條中  
之事を施行するを千八百六十三年第一月一  
日より算し五年之間延すことを承諾せんと  
預定せり (「英國倫敦覺書」一八六二)

この第はきまつて月の字のまへにあらはれるの  
であるが、これはいったい いかなるしるものな  
のか。なぜ このみぢかいあひだにだけもちゐら  
れたのか (たゞしくはこのあひだだけではないの

であるけれど、それはそれ、いまとてまんねふの  
ことはつかひうるのとおなじこと)。このさゝ  
やかな発見においては、このふたつはむすびつい  
てゐる。つまり、そのもちゐられしとつぎのみ  
ぢかさはそのいひまはしにおこると、いな、い  
ひまはしをうみいだしたきもちそのものさま  
がはりによるのである。

二 とはれるべきことから

そのほかの例としてじつさいにあらはれたもの  
はつぎのごとくである。

(二) 第七月、我和蘭にて四月五月の間に方て、  
家屋を掃除する禮加例の如く、彼地に於て  
は本月之を行ふ事たり、大抵屋を淨くし竈  
を汚る等なり、(ヒスセル著、杉田成卿ほか  
譯『日本風俗備考』十五、一八三三)

(三) 一千八百三十九年<sup>天保十</sup>第一月一日に、大清  
帝より廣東湊において調役兼奉行を申付て、  
阿片商賣停止の命あり。(松浦靜山『甲子夜  
話三編』七十八、一八四一ごろ)

(四) この歳の第二月十七日<sup>今の西洋の四月なりと記セ  
ウス</sup>のに洪水出づ。(山村才助『西洋雜記』  
一八四八)

(五) 此レヨリ英軍、カヲ失テ遂ニ和睦ヲ議シ千  
七百八十三年第一月二十日假條約ヲ結ヒ翌  
年第九月三日日本條約ヲ取り替シ合衆國ノ不  
羈獨立ヲ周ク布告シタリ (福澤諭吉『西洋  
事情』初編、一八六六)

用例、これにつくはずもないけれど、このことば  
が生命をたもつたはじめとをはりはだいたいこ  
んなところであらうと かんがへてよい。

この例をみて一見このころには つぎには第  
の字を附すものであつたかのやうであるが、さう  
ではない。

(六) 慶應二年丙寅七月福澤諭吉 誌 (福澤諭吉  
『西洋事情』初編、一八六六)

例示としてはこれでじふぶんであらう。たまぐ  
第の字のおちたとするにはこの例はおほすぎる。  
そもぐ 第の字を附すといふ慣例などなかつた  
のであるから。

三 第の字のつたへるもの

さうであつてみれば第の字の “意味” とはなん  
であらうか。もつたいぶるまでもないので さつさ  
と書いてしまふと、これは みづからの暦 (すな  
はち日本の著者にあつては和暦) にあらざる暦  
におけるつきを明示するためのものと かんがへ  
られる。つぎのごときはその顯著な例であらう。

(七) 三月朔日、洋曆一千八百七十年第四月一日  
(『外務省日誌』明治三年、一八七〇)

そのやうにみるといままでの例もすべて説明  
がゆく。(二) は唯一の和暦に第をつける例で

あるけれど、著者は和蘭人であるからかれこれさかさまに翻譯したのであらうか。その他の例はすべて西曆ないし猶太曆のはなしであるから、和曆でないことは明白である。

この第の字がどこからきたのか、いまのところそのみなもとをみいだしてはゐない。たとへば中國でそのやうなもちみかたをよくしたか、みおよんだなかではいなまざるをえない。しかしながらいままでひいてきた例やその意味からあきらかなやうに、これは蘭學のなかにそだってきたもののやうである。かといって蘭學のなかでも太陽曆について論じた書物にかやうのひまはしをみいだすことはまづないことであらうとおもはれる(さきの例はその點まれのまれであつたわけだ)。蘭和辭書のたぐひにもそのやうな例はみいだしがたく、すくなくともこのひまはしは蘭學者ならばだれかれかまはずもちゐるやうなものではなかつたものとおもはれる。

#### 四 明治改曆

そんなひまはしであるから一八七三年太陽曆を採用した明治改曆によつてちからをうしなふことは決定的であつた。つぎのものはその最後にちかひものであらう。

(八) 第一月廿九日 神武天皇御即位相當ニ付祝  
日ト被定例年御祭典被執行候事(明治五年  
太政官布告第三百四十四號)

さきにいく例かをひいた福澤諭吉の『改曆辨』  
(一八七三)といふ明治改曆の解説書では第何月

といふひまはしはすつかりかげをひそめてゐる。これは太陽太陰曆たる和曆と太陽曆たる西洋曆とを差異化する——*différencier*——必要がなくなつたからであらう。かれの著作は慶應義塾によつて檢索もしうる本文が供されてゐる。そこであれこれさぐつてみると第何月とかがいはなくなつたのはやはり明治改曆の前後に屬するのである。

とはいへそののちも第何月といふひかたはほろびはしない。洋學者の田中義廉が『小學日本文典』(一八七四)のみかへしに「田中義廉著／小學日本文典 卷二／明治七年第一月猫窠書屋」とうやく／しくかゝげたのはすでによが太陽曆でまはりはじめたころであつた。めにはいつたなかでも大正のころまでは第何月といふ例をみいだせなくはない。しかしそれはすでにとくべつな意味のないものとなつてゐたのではないかとおもふのである。

#### 五 をはりに

この現象そのものはむしろ文化的なもので、こゝとばそのもののおもしろさではかならずしもないとうつるむきもあらうが、こゝには譯語といふものがしば／＼かうむる特質があらはれてゐる。譯語には原語といふものがあり、その原語を譯語によく移さうとほつしたならば、あたかもこはれた道具のやうに捨てられてしまふといふさういふ特質が。第何月はそのやうな譯語ではないけれども、輸入概念をのべたことばといふ

點で、にかよつた存在である。

このみじかきふみにこめたるは、いくまきにもあるいにしへぶみなることばにそへられたるさしもみちかきときあかしのひとつ／＼にも、おくにはひとまきをつひやすべきふることがたりのまゝありしことにはべりき。いまだおほかたのためしもあつめをへざれば、をぶみだにものすもをこがましくはべれど、さるべきためしにも、かしこきかたのたゞさばやとてふでそますあれば、おろかなるみにも功德はべりつべし。あへておのがことあげをのべんとせしにははべらざるなり。

この小文をものすについては岡田芳朗『明治改曆「時」の文明開化』(大修館、一九九四)を參看した。